文学作品に登場する動物たち①　～　宮沢賢治の短編小説（童話）『よだかの星』

ヨタカ目　ヨタカ科

ヨタカ

準絶滅危惧(Cランク)
（栃木県レッドリスト）

＜佐高所蔵の剥製＞

口を開けたヨタカ
（朝日百科「動物たちの地球」より）

『**よだかは、実にみにくい鳥です。**
顔は、ところどころ、味噌をつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。
足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。
ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまうという工合でした。』
（宮沢賢治作「よだかの星」の冒頭）

ヨタカは口をとてつもなく大きく開けることができる鳥である。本校所蔵の剥製を見る限り、長さ１ｃｍあるかないかの小さなくちばしであるが、**目の下まで口が切れ込んでいる**ので、頭とほぼ同じ大きさまで口を開けることができる。夕方から夜間に、その口を大きく開いて、飛んでいる虫を追い回し、一飲みにするのである。さらに口の周りには口ひげが生えていて、一端口に入った虫が逃げられない捕虫網の役割を果たしている。また、作品にも触れられているとおり、脚は短く歩行には不適とされている。

『（ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまおう。）』
（同「よだかの星」の一節）

ヨタカは、４月頃日本に渡来し６月頃に産卵、秋には南アジア方面に旅立つ夏鳥として知られている。本県では、1970年代までは平野部から山地に普通に生息し繁殖していたが1980年代後半からは特に**平野部の森林での減少が著しい**とされている（「栃木県レッドデータブック」より）。エサとなる虫が群れているところであれば繁殖することは可能なはずであるが、ヨタカを取り巻く環境は大きく変わりつつあるのだろうか。

『それからしばらくたってよだかははっきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま燐の火のような**青い美しい光**になって、しずかに燃えているのを見ました。
すぐとなりは、カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになっていました。
そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。
今でもまだ燃えています。』　（同「よだかの星」の末尾）

「よだかの星」は、ヨタカの習性をよく捉えて書かれている。虫の捕らえ方などはとてもリアルであり、改めて読んでみると、自然科学に造詣が深い宮沢賢治の作品の素晴らしさを再認識できる。